

そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて、窓をバツとけりました。ガラスは二、三枚ものすごい音をして碎け、窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをカッコウが矢のように外へ飛びだしていきました。そしてもうどこまでも、どこまでもまっすぐに飛んで行って、とうとう見えなくなっていました。ゴーシュはしばらくあきれたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように部屋のすみへころがって、眠ってしまいました。次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロをひいて疲れて水を一杯飲んでいみると、また扉をこつこつたたく音がしました。今夜は何か来ても、昨夜のカッコウのようにはなるまい。始めから脅かして追い払ってやろうと思って、コップをもったまま待ち構えていると、扉が少し開いてたぬきの子が入ってきま

した。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広く開いておいて、どんと足を踏んで「こら、たぬき、お前はたぬき汁になりたいのか。」たぬきの子はぼんやりした顔をしています。ゴーシュはもう一度「たぬき、お前はたぬき汁を知っているか。」と怒鳴りました。すると、たぬきの子はまたもやぼんやりした顔をしてきちんと床へ座りました。そしてゴーシ